

# バレーボールの言動とマナーについて

## ——第1報 試合における発声について——

森田 昭子      郷守 重蔵      吉野 みね子

### I 緒 言

昨今のバレーボール大会という大会に臨んでみて、勝たんがためにと願う目的に対しての手段として、ワイワイ騒いでいるような気がしてならない。大学女子リーグ戦でも、毎年うるさくなっていくような傾向が見られる。大会にあたって、よく会長から一番うるさいスポーツといわれている。「静かな闘志」でできないものだろうか。うるさくなったのはプレーヤーだけでなく、応援者にもいえると思います。42年11月6日、朝日新聞<sup>4)</sup>のハーフタイムを見ると、全日本バレーボール大会男子選手権決勝で、Aの応援席から「この野郎しぶい顔をするな」などと相手選手への口ぎたないヤジがひっきりなしにとび、場内では悪評しきりと書かれていた。女子にはこれほどでもないが、体育館がわれそうになるほどうるさい。よく正々堂々と選手が宣誓をするが、一体、スポーツマンシップとは正々堂々とか、フェアプレーとかいうものは一体何を意味するのか、と考えさせられる。そこで今回は、第一報としてバレーボール選手のチームにおける発声内容を分析し、三項目について明らかにしようとした。

1. 発声と得点との関係
2. ゲームの勝敗と発声との関係
3. チーム主将の発声内容

### II 研究対象

- a. 関東大学バレーボール秋季一部リーグ戦出場チーム（6校）  
日本体育大学、東京教育大学、東京学芸大学、日本女子体育大学、国土館大学、東京女子体育大学
  - b. 全日本大学女子バレーボール選手権大会出場チーム（4校）  
早稲田大学、甲子園短期大学、松陰女子短期大学、共立女子大学
- 以上 10 校 40 名を対象とした。

### III 研究方法

該当の試合について、プレーヤー1名ごとに記録員1名を当てて、試合中における選手の発声を前半（1～5点まで） 後半（6～10点まで） 後半（11～15点まで）に分け記録し、項目ごとに集計した。

項目については、次のとおりである。

- (1) 作戦的な発声。

- (2) チームの志気を鼓舞することを目的とした発声。
- (3) チームを団結させようとする意図で行なわれた発声。
- (4) 相手のペースを乱すことを意図する発声。
- (5) 無意味な発声。

以上5項目である。

#### IV 研究結果並びに考察

##### A. 試合中における選手の発声傾向

選手の試合中における発声については、第1表のとおりである。

第1表 選手の発声傾向

		1セット	2セット	3セット	4セット	5セット	計
自 己 の す る も の	作 戦 的 な も の	99 (7.7)	102 (6.8)	93 (6.3)	23 (3.7)	16 (2.9)	333 (6.1)
	志気鼓舞チームワークに関するもの	567 (44.0)	567 (37.6)	595 (40.3)	194 (30.9)	203 (37.2)	2126 (39.0)
	自己の失敗や他人の失敗に関するもの	72 (5.6)	50 (3.3)	61 (4.2)	20 (3.2)	11 (2.0)	214 (3.9)
相 手 チ ー ム に 対 す る も の		167 (13.0)	253 (16.8)	197 (13.3)	94 (14.8)	67 (12.2)	778 (14.3)
か け 声 な ど 無 意 識 的 な も の		384 (29.7)	536 (35.5)	530 (35.9)	298 (47.4)	250 (45.7)	1998 (36.7)
計		1289 (23.7)	1508 (27.7)	1476 (27.1)	629 (11.5)	547 (10.0)	5449 (100.0)

選手の発声内容は、この表にみられたように、大部分は味方の激励的な内容のもの、また無意味な掛声的なものによってしめられている。つづいて相手チームに対するもの、作戦的なもの、自己の失敗や他人の失敗に関するものとなっている。

##### 1. 選手の発声内容

(ア) 作戦的なものとして

どのチームもトス、持ってこいが多く、フェント、クィック、レフト、ライトとか、作戦的となるものは極めて少なかった。

(イ) 志気鼓舞、チームワークに関するもの

さあ1本お願いします、ナイスナイス、気合い入れよう、ゆっくり行こう、ファイト、前でとかプレーそのものの指示、注意喚起は少なかった。

(ウ) 自己の失敗や他人の失敗に関するもの

すみません、ごめん、悪いなどがあげられていた。

(エ) 相手チームに対するものについて

ナイスサーブ、打て、ラッキー、チャンスといったことばが殆んどであり、相手を軽蔑するとか、揶揄するとかいった発声は、男子には時々見られるが、女子には「チキショウ」といった言葉が一つ記録されていた。

(オ) 無意識的なものについて

ヨイショ、オイショ、ソレー、ホラ、エイ、エイサーが割合をしめている。

この傾向については東京オリンピックバレーボール大会、日ソ対抗バレーボール試合などでみたバレーボールファンが42年4月16日朝日新聞声欄<sup>2)</sup>の投書に「日本男子選手

は、点を取るごとにコートの中を意味なく走りまわったり、お互いに拍手したり大さわぎ、その1点で試合が決するのならいざ知らず、なぜあのように1点ごとにおおげさにするのだろう」というものがあった。これに対して、バレーボールの選手であった人<sup>3)</sup>から声の出すことの必要性について反論されている。

しかし、一般のファンからの客観的な立場からみた、バレーボールについての喧騒なゲームであるという見方は、この調査からみても明らかで、ヨイショ、ソレーなどといった無意味的な発言は、氣勢をあげるとともに、相手に対する何等かの牽制的意味合いをもつもので、この点フェアプレーの精神から言っても好ましくないといえよう。

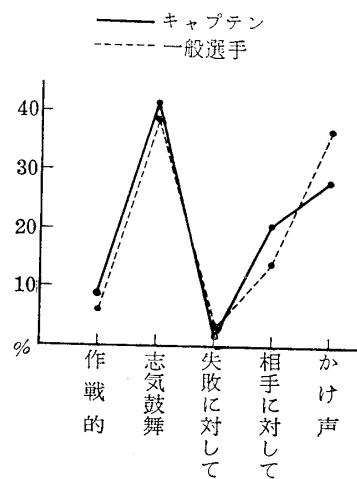
### B. 主将の試合中における発声傾向

主将は、チーム統轄の中核でありチームワークの核心である。試合中主将は、チームメートに対して時には作戦的な指示をし、リードしてゆきがちな気分を引きしめるため、或は敗色濃厚になった時ややもすれば消沈しがちな気分を高めたりしてチームを引っ張っていくことが多いと考えられる。データは6人の主将についてのみ記録をとった結果、これをもってバレーボールチームにおける主将の発言を推断することはできないと思うが、何か現在の大学女子バレーボールチームにおける主将の傾向をおしはかることはできよう。

主将の試合中における発声については第2表のとおりである。

第2表 主将の発声傾向

		1セット	2セット	3セット	4セット	5セット	計
自に 己に 関 する もの	作 戦 的 な も の	38 (10.4)	45 (10.5)	10 (6.8)	1 (1.0)	5 (5.6)	99 (8.7)
	志気鼓舞チームワークに関するもの	150 (41.1)	183 (42.9)	63 (42.9)	38 (36.5)	35 (38.4)	469 (41.4)
	自己の失敗や他人の失敗に関するもの	6 (2.7)	5 (1.2)	4 (2.6)	1 (1.0)	0	16 (1.3)
相 手 チーム 対 する も の		82 (21.4)	97 (22.7)	17 (11.6)	19 (18.3)	16 (17.6)	231 (20.4)
か け 声 など 無 意 識 的 な も の		89 (24.4)	97 (22.7)	53 (36.1)	45 (43.2)	35 (38.4)	319 (28.1)
計		365 (32.2)	427 (37.6)	147 (13.0)	104 (9.2)	91 (8.0)	1134 (100)



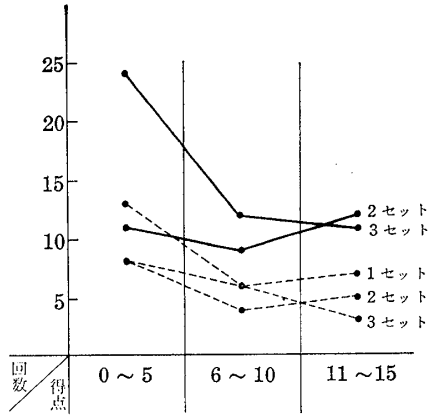
第1図

1. 主将の発声内容は、この表に見られるように、自チームの志気鼓舞、チームワーク等に関するものが最も多く、次いで掛け声、その他無意識的な発声、つづいて相手チームに対するものとなっており、この傾向は一般プレーヤーの発声傾向と同様の傾向を示している。ただ、内容的にみると自チームのプレーヤーに対する注意、志気鼓舞に関する発声及び相手チームに対する発声回数が多くなってきている。(第1図)

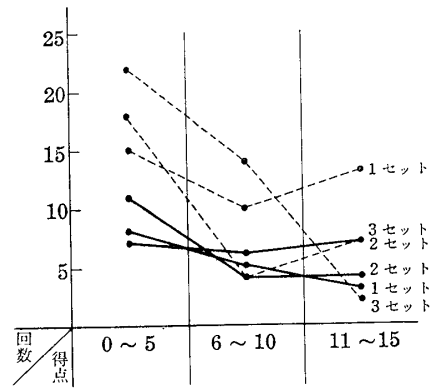
また、主将の1セット当り発声回数をみると、41.3回でこれを他の選手1人当り発声回数の43.6回と比べ大差はない。発声回数は主将の性格、その

主将の各セット毎における前半, 中半, 後半の発声

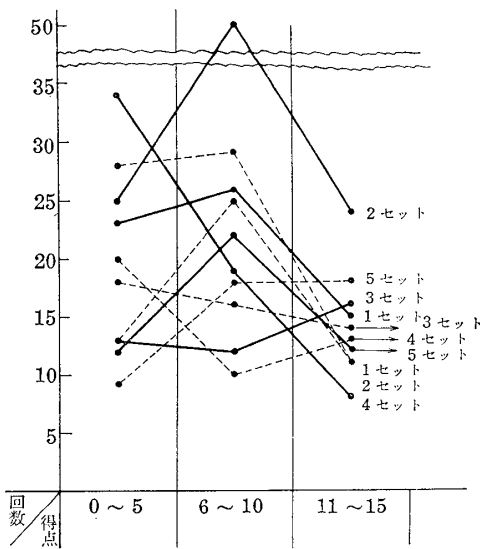
○ } 勝者      × } 敗者



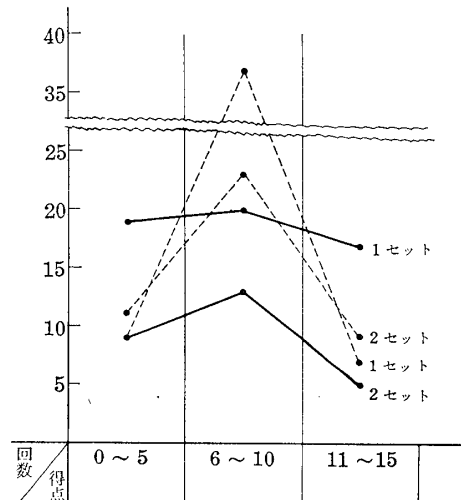
○日体大 対 ×日女体大



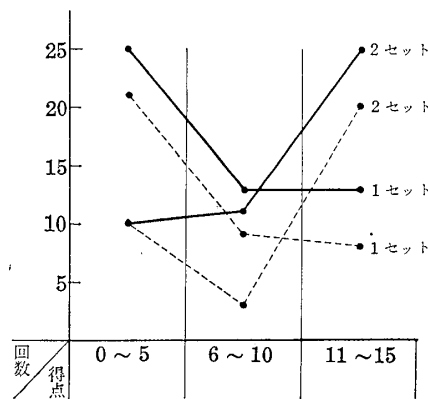
○東女体大 対 ×東学大



○東教大 対 ×国士館



○早大 対 ×松蔭大



○甲子園大 対 ×共立大

チーム内におけるあり方によっても若干の差ができています。

2. 勝利チームと敗戦チームとにおける主将の発声傾向は、第3表のとおりである。

発声内容からみると、敗戦チームの主将の発声内容では、作戦的なものが目立って増加していることと、自チームの志気鼓舞を目的としたものが多くなっている。

第3表 主将の勝利チームと敗戦チームの発声傾向

		1セット	2セット	3セット	4セット	5セット	計
勝利チーム							
自 己 に 関 する もの	作 戦 的 な も の	12 (6.4)	14 (5.9)	2 (3.2)	0	0	28 (4.7)
	志気鼓舞チームワークに関するもの	74 (39.6)	106 (44.7)	25 (41.0)	16 (26.2)	13 (28.3)	234 (39.5)
	自己の失敗や他人の失敗に関するもの	3 (1.6)	5 (2.2)	0	0	0	8 (1.4)
相手チームに対するもの		44 (23.5)	52 (21.9)	9 (14.8)	11 (18.1)	9 (19.5)	125 (21.1)
かけ声など無意識的なもの		54 (28.9)	60 (25.3)	25 (41.0)	34 (55.7)	24 (52.2)	197 (33.3)
計		187 (31.6)	237 (40.0)	61 (10.3)	61 (10.3)	46 (7.8)	592 (100)
敗戦チーム							
		1セット	2セット	3セット	4セット	5セット	計
自 己 に 関 する もの	作 戦 的 な も の	26 (14.6)	31 (16.3)	8 (9.3)	1 (2.3)	5 (11.1)	71 (13.1)
	志気鼓舞チームワークに関するもの	76 (42.7)	77 (40.5)	38 (44.2)	22 (51.2)	22 (48.9)	235 (43.4)
	自己の失敗や他人の失敗に関するもの	3 (1.7)	0	4 (4.6)	1 (2.3)	0	8 (1.4)
相手チームに対するもの		38 (21.3)	45 (23.7)	8 (9.3)	8 (18.6)	7 (15.6)	106 (19.6)
かけ声など無意識的なもの		35 (19.7)	37 (19.5)	28 (32.6)	11 (25.6)	11 (24.4)	122 (22.5)
計		178 (32.8)	190 (35.1)	86 (15.9)	43 (7.9)	45 (8.3)	542 (100)

### 3. 主将の発声内容

主将は、チームのプレー及びチームワークの中核として活動すべき責任があつて、そのため、他の一般プレーヤーとかなり違った内容の発声が多くみられるのではないかと考えていたが、結果は殆んど差がみられなかった。

(ア) 作戦的なものとしては、トス、オープンといったものが大分部で、どこを攻撃するとかクィックで行けとか、〇〇をマークしろとかいったものは見られなかった。作戦或いは戦術的なことは、サインで行なわれている結果なのか、ベンチの指示に従って、作戦タイム時に行なわれるだけなのか不明であるが、もっとこの面での発声回数があつてよいのではないかと考えられる。このことは一方、主将のゲームにおける位置づけが、特に女子において余り重要性がもたせられていないのか、何か割り切れないものが感じられる。

(イ) 自己や他人の失敗に対する注意

この点の発声は殆んどなく、特に他のプレーヤーのミスに対する注意は皆無であつた。

(ウ) 志気鼓舞、チームワーク維持のための発声

この点については、かなり数多く発声されているがよし1本、1本取ろうといったこと

ばが多く、頑張っていこう、おちついていこう、しまろうよといったことばは余り多くみられなかった。

(エ) 相手チームに対するもの

そらいけ、打て打て、ナイスキル、ナイスサーブ、ラッキーラッキー、チャンスといったことばが殆んどであった。ただ、エイクソといったことばが一つ記録されていた。

## V 総括並びに結語

主将及びチーム員の発声内容について資料に基づき概観してきたが、バレーボールの試合が喧騒にわたることに対する批判がかなり以前より強くなされてきており、その原因には、選手自身の他に応援団の無秩序な声援が大きなものになっているが、選手自体についてもっと反省すべき事項の多いこと、監督コーチの指導にも関係することを示していることがわかった。

即ち

1. 氣勢をあげる、お祭り騒ぎ的な発声が余りにも多い。
2. この発声をもとにして相手のプレーを牽制或はペースをくずそうとすることを間接的ではあろうがねらっている傾向がみられる。
3. 選手の発声内容としては、プレーに直接関係のあるものがもっと増加してよいのではないか。

5. 主将としては、チームプレーの中核としての言動がもっと生れてきてよいのではないか。主将がチーム内においてどのような位置を占めるようになってきているのか、最近のバレーボールチームの構造における主将の役割というものの喪失が感じられる。

以上のようなことから考えてみると、ワイワイ無意味な声を出した場合と必要な指示、注意の喚起程度の内容の発声のみに止めた場合とで、果たして勝敗の結果にどのような差があるのか。指導者、プレーヤーが声を出すことによって、ともすれば陥入り勝ちな不安感や絶望感を払拭することにどのように影響するのか、明らかにしていく必要があるし、いわゆる「おみこしかつぎ」的「くままつり」的発声が習慣化され、騒ぎがなりたてるといことが強さを現わすと考えられているとするならばこのままでよいのであろうか、バレーボールをプレーするものの望ましい姿、望ましいマナーや態度はいかにあるべきか、これらを通して、バレーボール選手が自己をみつめ相手を正しくみつめ、人間形成に寄与し得ることが可能であるならばと、願いをこめて研究を進めていきたい。

本稿を終るに臨み、御協力を頂いた九段高校栃堀申二先生を始め、本学バレーボール部員の皆様に深く感謝の意を表す。

## 参 考 文 献

- 1) 昭和 43. 11. 6 朝日新聞「ハーフタイム」.
- 2) 昭和 43. 4. 16 朝日新聞「声欄」.
- 3) 昭和 43. 4. 22 朝日新聞「声欄」.